

# メルティングポットの誕生

——メルティングポット論の系譜（1）——

The Melting-Pot is Born:  
Arguments on the Melting-Pot Theory (1)

村 井 忠 政

Tadamasa MURAI

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

Vol. 2

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 2号  
2004年1月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY  
NAGOYA JAPAN  
JANUARY 2004

# メルティングポットの誕生

## ——メルティングポット論の系譜（1）——

村井忠政

**要旨** かつてアメリカ社会を象徴するシンボルとして一世を風靡した「人種の坩堝」（メルティングポット）であったが、近年に至って「サラダボウル」によってとって代わられた感がある。「アメリカナイゼーション」と呼ばれるアメリカ社会への移民の同化<sup>1</sup>のプロセスを説明するパラダイムとしては「アングロ・コンフォーミティ論」「メルティングポット論」「文化的多元主義」などがあげられるが、ここではとりわけ「メルティングポット論」をめぐる議論を中心に挙げた。<sup>2</sup>まずその理論的系譜をクレヴカールの『アメリカ農夫の手紙』、ターナーの「フロンティア理論」、ザングウィルの戯曲『メルティングポット』まで溯り、この隠喩がアメリカ社会において幅広い層に受け入れられていった経緯とその原因を当時のアメリカのエスニック状況を背景に分析した。その結果、シンボルとしては圧倒的なインパクトと強力なイメージ喚起力を持つメルティングポット論ではあるが、他面において社会学的同化理論としては多くの誤解や攻撃を招く曖昧さを内包していることが明らかになった。

**キーワード**：同化、アメリカナイゼーション、メルティングポット、アングロ・コンフォーミティ、文化的多元主義

### はじめに

1960年代の黒人を中心とする公民権運動の盛り上がりと、それに刺激された1970年代の「エスニック・リヴァイヴァル」現象のなかでエスニック・マイノリティの自己主張の聲が高まるにつれて、アメリカは「人種・民族の坩堝」であるとするメルティングポット論、あるいはWASPの支配的価値への同調を強制するアングロ・コンフォーミティ論<sup>3</sup>に代わって、各エスニック集団は固有の文化的遺産を保ちつつアメリカ社会の発展に寄与すべきとする文化的多元主義（文化的多元論）ないし多文化主義が説得力をもつようになった。長いあいだ社会の片隅で貧困と無知に苦しんでいた少数派集団のなかから、大学教育や専門的な訓練を通じて多くの指導者が生まれたこと、またエスニック人口の都市化とともに彼らの政治面での組織化が進んだことなども、多文化主義の隆盛に拍車をかけた要因としてあげられる。いまやメルティングポット論は同化主義を意味するネガティブなシンボルへと転じ、かわりに「サラダボウル」や「モザイク」といった語がレトリックとして使われるようになってきている。しかしその一方で1980年代以降「メルティングポット」の復活を指摘する論文や著書が現れてきていることも事実である。

たとえばスタインバーグは、メルティングポットの復活について次のように述べている。「母

語の喪失とその他の移民文化の核心的諸要素の喪失、移民コミュニティの拡散、過去数世代にわたる経済的・社会的移動、エスニック文化の侵食と萎縮、かつてエスニシティを支えていた宗教の衰退、多様なエスニシティ下位社会の文化的収斂、異なるエスニック・グループ間および異なる宗教間のインターマリッジ（交婚）がますます増大しつつあること——過去1世紀の間にアメリカのエスニック集団の間に起こったこれらの大きな変化を考慮すると、われわれは過去数十年にわたってメルティングポットが働いているのを目撃しているのだという結論を避けることはできない。」<sup>4</sup>

本論の目的は、移民のアメリカ社会への同化パラダイムの1つとして、圧倒的なインパクトを持ったメルティングポットというシンボルが生まれ普及していった系譜を辿ることによって、その後多くの批判を次々に浴びながらも、この錬金術／冶金学のレトリックが依然として強いイメージを人々に与えつづけている原因を考察するところにある。

## 1 メルティングポット論の先駆（その1）

——クレヴクール『アメリカ農夫の手紙』——

### 『アメリカ農夫の手紙』を読む

メルティングポット論について論じる際に、アメリカ文明論の古典といわれるクレヴクールの『アメリカ農夫の手紙』<sup>5</sup>（以下、『手紙』と略記）を看過することはできない。実際、アメリカで多文化主義論争が激しくなった90年代初頭から、このアメリカ文明論の古典が引用される頻度が一段と高まった。そしてそのほとんどの場合、いわゆるメルティングポット論の先駆として、多文化主義に反対する立場の学者たちがクレヴクールの言葉を引用している。

クレヴクールこと、フランス人ミシェル・ギョーム・ジャン・ド・クレヴクール（フランス国籍を捨てアメリカ人になってからはジェームズ・ヘクター・セント・ジョンと改名）が書簡形式で綴った『手紙』（1782年、ロンドン初刊）が、いつからアメリカ文明論の古典として不動の位置を占めているのかは判らないが、そこに綴られたニューヨーク西部の農村社会の姿が、すでに述べたとおり、メルティングポット論の先駆として研究者に頻繁に言及される事実は誰でも知っている。クレヴクールの『手紙』は、引用される頻度において、トクヴィルの『アメリカにおけるデモクラシー』と並ぶといわれるが、彼の『手紙』のなかでもとりわけ頻繁に引用される「手紙3 アメリカ人とは何か」に綴られたその最も有名な文章の1節を次に引いてみよう。

ではアメリカ人、この新しい人間は、何者でしょうか。ヨーロッパ人でもなければ、ヨーロッパ人の子孫でもありません。したがって、他のどの国にも見られない不思議な混血です。私はこんな家族を知っていますが、祖父はイングランド人で、その妻はオランダ人、息子はフランス人の女性と結婚し、今いる4人の息子たちは今では4人とも国籍の違う妻を娶っています。偏見も生活様式も、昔のものはすべて放棄し、新しいものは、自分の受け入れてきた新しい生活様式、自分の従う新しい政府、自分の持っている新しい地位などから受け取ってゆく、そう

いう人がアメリカ人なのです。彼は、わが偉大なる「育ての母」(*alma mater*)の広い膝に抱かれることによってアメリカ人となるのです。ここでは、あらゆる国々から来た個人が溶け合い、一つの新しい人種となっているのですから、彼らの労働と子孫はいつの日にかこの世界に偉大な変化をもたらすでしょう。アメリカ人は、遠い昔に東方で始まったじつに多くの芸術、学問、活力、勤勉を持ち運んでくる西方の巡礼者です。アメリカ人はかつて、ヨーロッパ全土に散在していました。彼らはここで合流して、もっとも素晴らしい人間集団の一つとなっているのですが、このような集団はかつてあったためしはなく、これからも、彼らの住む異質の風土の力によって独自のものになってゆくでしょう。したがって、アメリカ人が、自分もしくは祖先たちの生まれた国よりもいっそうこの国を愛するのは当然のことなのです。ここでは、勤勉の報酬は、仕事の進み具合と同じ歩調で増えてゆきます。彼の労働は自然の根本原理である利己心に基づいています。これより強い誘因が必要でしょうか。かつては一切れのパンをねだって得られなかった妻や子どもたちも、今や、肥えて陽気になり、豊穡な収穫によって自分たちみんなの食糧と衣類をもたらしてくれるはずの畑を、父を助けて喜んで耕しておりますが、その収穫は一部たりとも、専制君主や裕福な僧院長や強大な領主に取り上げられることはありません。(中略)アメリカ人は新しい原則に基づいて行動する新しい人間です。したがって、アメリカ人は新しい思想を抱き、新しい意見を持たなければなりません。不本意な怠惰、奴隷的屈従、貧困、無益な労働から、豊かな生計を報酬として与えてくれるまったく異なった性質の労働へと移ったのです。これがアメリカ人です。<sup>6</sup>

### クレヴクールの「アメリカ賛歌」

大変長い引用になったが、たしかにこの一節を読む限り、クレヴクールのアメリカに対する楽観的かつ肯定的な見方がよく現れている。ここでの彼の主張は、次の4点に要約できると思われる。

1. アメリカ人はヨーロッパ人でもその子孫でもなく、「ほかのどの国にも見られない不思議な混血である」。ヨーロッパからの移民たちは、アメリカという偉大な「育ての母」のなかでアメリカ人という「新しい人種」として生まれ変わるとみなされている。ここにはすでにアメリカをメルティングポットとみなす発想が現れており、この意味で、クレヴクールの『手紙』はメルティングポット論の先駆と言うことができる。ただし、クレヴクール自身は「ポット」(坩堝)というメタファー(隠喩)は使っていないことに注目したい。ここでは「ポット」という錬金術もしくは冶金学からとられた隠喩の代わりに「育ての母」(*Alma Mater*)というラテン語が使われている。すなわち、クレヴクールはアメリカの自然を「母なる大地」に譬え、この大地に抱かれて旧世界の人間は新しい人間に生まれ変わると言っているのだ。<sup>7</sup>
2. 専制君主、僧院長、領主などに象徴されるヨーロッパの古い封建的な制度に対して、アメリカ人は「新しい思想」、「新しい制度」に生きる未来志向的な存在として描かれている。す

なわち、アメリカは圧政と悪徳、搾取と貧困に呪われたヨーロッパという旧世界の文明にとって代わる新しい可能性としてとらえられている。この一節だけでも「新しい」という形容詞が繰り返し使われていることに注目してほしい。ラッセル・ナイによると、クレヴクールは「手紙3」の中だけでも「新しい」という形容詞を17回も使用しており、それと同時に「変身」(metamorphosis)、「再生」(regeneration)、「復活」(resurrection)といった語もしばしば使用しているという。<sup>8</sup>

3. 「ここでは、あらゆる国々から来た個人が融け合い、一つの新しい人種となっているのですから、彼らの労働と子孫はいつの日にかこの世界に偉大な変化をもたらすでしょう」。ここでは「新しい人種」がアメリカに将来「偉大な変化」をもたらすであろうという予言がなされている。またここで「融ける」(melt)という言葉が使われていることにも注目したい。
4. 「勤勉の報酬は、仕事の進み具合と同じ歩調で増えてゆきます」という文章に、われわれはアメリカでは労働と勤勉が世俗的な成功によって報われるという「アメリカン・ドリーム」の萌芽を読み取ることができる。

### 「クレヴクール神話」の検証

上に見たように、クレヴクールの『手紙』には新しさ、未来志向、多元性、融合など、合衆国の文化の特性とされるものが見事に綴られており、アメリカ文明論の古典とこれが評されるのも納得がいく。しかしながら、このような手放しのアメリカ賛美は、当然のことながら、後世の歴史家によって批判の対象となる。現代アメリカの歴史家G・ガーストルは「アメリカ化」(Americanization)に関するクレヴクールの楽観論を「クレヴクール神話」と呼び、この神話の信憑性を、20世紀のヨーロッパ移民に関する歴史学者や社会学者による研究の成果に基づいて検証しようとした。ガーストルによれば「クレヴクール神話」は次の4つの主張からなっているという。<sup>9</sup>

1. ヨーロッパからの移民たちは、アメリカ人になるために彼らの旧世界でのやり方を捨てることを望んだ。
2. 移民たちは自分たちの行く手に何らの障害も見出さなかったため、アメリカ化は迅速かつ容易なものであった。
3. アメリカ化は移民たちを時空を超えてどこでも変わることはない単一の人種、文化、ないしは民族に溶かしてしまった。
4. 移民たちはアメリカ化を隷従、服従、貧困、その他の旧世界(ヨーロッパ)の拘束からの解放として経験している。

ガーストルによると、20世紀初頭の都市における実証的なエスニシティ・移民研究で大きな業績を残しているシカゴ学派の社会学者パーク、トマス、バージェスらの理論には、ヨーロッパからの移民が急速かつ容易にアメリカ人という「新しい人間」になっていくという意気軒昂たる楽観論は見られない。彼らはクレヴクールのアメリカ化神話から一定の距離を置くようになってい

る。移民はアメリカで激しい社会的敵意、労働市場における競争に直面し、彼ら自身のエスニック・コミュニティに結集する。移民がアメリカに同化する過程は苦痛に満ちていることが認識され、パークらの理論には「解放」としてのアメリカ化という「クレヴクール神話」からの離脱が見られるという。<sup>10</sup>しかし彼らは移民のアメリカ化は不可逆の過程であり、各移民系集団はアメリカ文化を吸収し、ホスト社会の多様なネットワークの中に吸収されていき、次第にその民族的な資質を軽減し、ついには集団としては消滅してしまうと考えた。したがって、彼らは移民の同化に関して基本的には楽観的だったというのがガーストルの結論である。<sup>11</sup>この意味では、シカゴ学派の社会学者たちは、スタインバーグの言うように基本的にはメルティングポット論者（melting pot theorists）であったと言ってよいのだろう。<sup>12</sup>

クレヴクールは確かにヨーロッパの諸民族がアメリカという大地に抱かれて一つの新しい民族、すなわちアメリカ人に生まれ変わるという発想を使ったという意味ではメルティングポット論の先駆者ということはあるが、彼はその著作のなかで「溶ける」（melt）という語は使っているが、「メルティングポット」（melting pot）という語は一度も使っていない。したがって、厳密に言うところクレヴクールをしてメルティングポット論の創始者ということとはできない。アーサー・マンによれば、本格的なメルティングポット論を展開したザングウィル以前に、4人の著作家がそれを予期させる言及をしていたという。それら4人としてマンが挙げているのは、上述したクレヴクールのほかに作家のラルフ・W・エマーソン、歴史家のフレデリック・ジャクソン・ターナー、大統領のセオドア・ローズヴェルトである。<sup>13</sup>

## 2 メルティングポット論の先駆（その2）

### ——ターナーの「フロンティア＝メルティングポット論」——

#### ターナーの「フロンティア＝メルティングポット論」

クレヴクールの文学的想像力によって呈示された「先駆的メルティングポット論」は、やがて歴史学によってより学問的に洗練されたものへと発展していく。アメリカの制度は本質的にアングロ・サクソンに、そして究極的にはゲルマンに起源をもつという見方が19世紀の多くの歴史家の間で支配的だった。これは「ゲルマン淵源説」と呼ばれる学説として知られ、アメリカの制度はすべて、中世ドイツの自由民の民会がアングロ・サクソン経由でアメリカに移植されたとするものである。しかし、フロンティアの雰囲気の色濃く残っていたウィスコンシン州で育った若き歴史学者フレデリック・ジャクソン・ターナーは、このような一元論的な歴史の見方に満足できなかった。ターナーは1893年、アメリカの学問史上もっとも大きな影響力をもった論文の一つとされる「アメリカ史におけるフロンティアの意義」<sup>14</sup>をアメリカ歴史学会に提出した。この論文でターナーが説いた「フロンティア理論」の論旨は、およそ次のようなものであった。

- (1) アメリカ史の真の見方は大西洋岸を中心としたものではなくて、大西部にあること。
- (2) 自由地が西方に存在し、それが絶えず後退し、アメリカ開拓が西進することが、アメリカ

カの発展を説明すること。

- (3) 絶えず後退するフロンティアが慣習の絆を断ち切って、新しい経験を提供し、新しい制度や活動を喚び起こすこと。
- (4) フロンティアは民主主義、国民主義、孤立主義、個人主義、文化追求への無関心、広く言っ、て、アメリカ人の国民性と強い関係があること。
- (5) フロンティアは東部に対して「安全弁」の役を果たしたこと。

ターナーは上に見たような「フロンティア理論」に基づいて、フロンティアが坩堝の働きをすることでアメリカ人という「複合的な国民性」(a composite nationality)の形成を促したとする仮説を提示したのである。「フロンティアの坩堝のなかで、移民はアメリカ化され、解放され、国籍においても性質においてもイギリス人ではない混合人種へと融合された。このプロセスは初期から今日まで続いている。」<sup>15</sup>その後、ターナーはミシシッピ川流域が果たした役割に関する論文のなかで「絶え間なく続いたために、複合的アメリカ人——その融合によって、新たな国民社会の血統を生み出す運命にある——を創り出した外国からの移民の波」<sup>16</sup>に言及している。

上の引用文のなかで「フロンティアの坩堝のなかで」(in the crucible of the frontier)という表現が見られることに注目したい。ここでは「メルティングポット」ではなく「坩堝」(crucible)という同意語が使われている。またこの坩堝のなかで移民はアメリカ人という「混合人種へと融合された」(fused into a mixed race)とも言及している。ここからターナーは、移民がアメリカ化される際にフロンティアがメルティングポットの機能を果たしたと考えていたことがわかる。ターナーは西部フロンティアがさまざまな民族遺産の溶媒の働きをしたこと、あるいは東部の都市以上にそうであったと主張しているが、これについての経験的な根拠は全くといっていいほど提示していない。<sup>17</sup>そのため、その後ターナーの「フロンティア理論」に対して、多くの歴史学者による批判が続々と出てくることになるが、<sup>18</sup>「フロンティア＝メルティングポット」の命題は、彼のより大きな影響力をもつ理論——すなわちフロンティアがアメリカの社会や性質の特徴的な輪郭を形作ったという理論——のなかの重要な部分であり続けた。<sup>19</sup>歴史家のエドワード・サヴェスは、ターナーにとってメルティングポットは重要な制度決定要因であり、この概念は彼の著作の中で繰り返し使われていると述べている。<sup>20</sup>

このように、ターナーは西部のフロンティアがヨーロッパからの移民を溶かすメルティングポットの役割を果たしたことを強調しているが、考えてみると彼の頭にあった移民とは北欧や西欧からの移民であった。つまり、これらの人々はアングロ・サクソン系の人々と大差のない文化や肉体的特徴をもつ人々からなる、いわゆる「旧移民」であった。「旧移民」とは文化や宗教、肉体的特徴を異にする南欧や東欧からのいわゆる「新移民」と呼ばれる人々が大量にアメリカに押し寄せてきたのは、19世紀末から20世紀初頭にかけてである。これら新移民は西部の農村ではなく、シカゴやニューヨークなどの大都市や工業地域に職を求めて集住することになる。そこでは「フロンティア＝メルティングポット」が成し遂げたと思われるほどに、「都市のメルティングポット」は果たしてうまく機能するだろうか。興味深いことにターナーは、拡大しつつある産業化の

要求を満たすため都市のスラムに定住した新移民に対してかなり冷淡であり、自身の描くアメリカの融和という構図のなかに彼らを加えなかったのである。<sup>21</sup>

### 3 メルティングポットの誕生

——戯曲『メルティングポット』における隠喩の考察——

#### 新移民の到来

1880年代に入ってヨーロッパからアメリカへの移民の出身地域に変化が起こりはじめた。ポテト飢饉による1850年代中葉のアイルランド移民の洪水が一段落したのち、南北戦争後のしばらくのあいだ、移民は主としてイギリス、ドイツ、スカンディナヴィア諸国からやっていたが、1880年代に入ってギリシャ、イタリアなどの南欧およびロシア、ポーランドなどの東欧からの移民が急激に増加しはじめた。これまでの西欧・北欧系の移民が旧移民と呼ばれるのに対し、南欧・東欧系移民は新移民（new immigrants）と呼ばれるようになった。この新移民の流入は1890年代には旧移民を凌駕し、20世紀に入ると移民の大半を占めるようになった。西欧に始まった資本主義の発展は、今や南欧・東欧の農村共同体を解体し、その過剰人口をアメリカに送り込みはじめた。さらに「ボグロム」と呼ばれたツァー(帝政ロシア皇帝)によるユダヤ人迫害が東欧から大量のユダヤ系移民をアメリカにもたらした。<sup>22</sup>

新移民の側には彼らがもっとも新しい移民であるという事情のほか、アメリカ社会に適応しにくい条件があった。彼らの宗教はギリシア正教、ローマ・カトリック、ユダヤ教など、いずれもアメリカのプロテスタント的な文化になじみにくいものであった。もちろん言葉も全く違っていた。しかも彼らの非識字率は、先進資本主義国からの同時期の移民に比べて著しく高かった。これらの新移民が果たしてアメリカ社会に同化することができるか否かについて、彼らを受け入れるホスト社会の側に不安が広まりつつあった。このような時にザングウィルの戯曲『メルティングポット』がアメリカで公演され、大きな反響を呼んだのである。

#### ザングウィルの戯曲『メルティングポット』

メルティングポットという言葉が最初に世に広めたのは、イギリスのユダヤ人劇作家イズリアル・ザングウィルの戯曲『メルティングポット』<sup>23</sup>である。この作品でザングウィルは、様々な異なる民族が一つに溶け合って新しい民族、すなわちアメリカ人に生まれ変わる様を力強い筆致で描写している。

『メルティングポット』は1908年にワシントンで初演され、その後シカゴで6ヵ月間のロングランを果たし、ニューヨークではなんと136回も公演されている。1909年に出版された4幕からなるこの戯曲は、皮肉なことに作者であるザングウィルの母国イギリスでよりはアメリカで人気を博し、多くの著名人の喝采を浴びた。とりわけ、1908年10月5日にワシントンのコロンビア・シアターでの初演を観劇したローズヴェルト大統領は、ザングウィルに宛てた書簡のなかで、「こ



れまでに観た演劇でこれほどまでに心を動かされたものはありません」と絶賛、これに応える形で、ザングウィルは1909年の『メルティングポット』の出版にあたって、同大統領にこの戯曲を献上している。<sup>24</sup>

『メルティングポット』は、主人公である若いロシア系ユダヤ人移民の青年の理想を描いたドラマで、天才的な作曲家であるこの青年の夢は、偉大な「アメリカ交響曲」を完成させることにあった。その交響曲のなかで彼は第2の祖国に選んだ国を、「神聖なメルティングポット」と見なす自身の深い洞察を表現しようとする。そのメルティングポットのなかでは、あらゆるエスニシティをもつ人びとが古い憎悪や違いを脱ぎ捨て、人類愛を具現化する。ドラマのなかで彼は、美しく教養あるキリスト教徒のロシア人女性と恋に落ちる。

ここで登場人物のプロフィールを簡単に紹介しておこう。この4幕からなる戯曲はロシアからニューヨークに移住してきたあるユダヤ人家族を軸に展開される。主人公のデイヴィッド・キサノー (David Quixano) は、ユダヤ人であるがゆえに郷里のモルダヴィア共和国の首都キシニョフ市で、ポグロムと呼ばれるユダヤ人虐殺事件に遭遇、両親ときょうだいを目の前で皆殺しにされ、彼自身も左肩を銃で撃たれ失神したが危うく一命を取りとめる。デイヴィッドの祖母に当たるキサノー夫人 (Frau Quixano) は正統派ユダヤ教徒で英語を全く理解できず、いまだにイディッシュ語を話し、過去の思い出の中に生きる孤独な日々を送っている。デイヴィッドの叔父メンデル (Mendel) はユダヤ教を捨てて、ニューヨーク湾内の島スタテンアイランドのキリスト教徒居住区に住み、音楽のレッスンを生計を立てている。主人公デイヴィッドが恋に落ちるヴェラ・レヴェンドール (Vera Revendal) は、ロシア貴族(男爵)の娘で、奇しくもデイヴィッドと同郷であることが判明する。この他の主な登場人物としては、アイルランド移民のメイドであるキャスリーン (Kathleen)、ドイツ移民の音楽監督パッペルマイスター (Herr Pappelmeister)、その雇業者クインシー・ダヴェンポート (Quincy Davenport) があげられる。

話の筋はデイヴィッドとヴェラの結婚をめぐるさまざまな障害についての議論を中心に展開するが、途中からロシア貴族であるヴェラの父親 (ラヴェンドール男爵) と継母が旧世界 (ヨーロッパ) から現れて、2人の仲を裂こうとする。ヴェラは旧世界の因習にとらわれている父親と意見が合わず2人の関係は疎遠になっていたのだ。またヴェラに思いを寄せる俗物ダヴェンポートはヴェラに言い寄るが相手にされない。このようにデイヴィッドとヴェラの間を分ける溝はきわめて深いことが明らかにされる。

## メルティングポットの誕生

第1幕の半ばで、デイヴィッドがヴェラに熱く想念を吐露するシーンがあるが、ここでアメリカを「神のメルティングポット」に喩えるレトリックが用いられている。

アメリカは神の坩堝、あらゆるヨーロッパ人種が融合し再生される偉大なるメルティングポットなのだ！ここに集う善良なる人びとよ、ここエリス島にいる諸君は、50の言葉を話し、50の歴史をもち、50の血の憎悪と敵対を持って対峙している。だが兄弟よ、諸君はいつ

までもそのままではない。諸君がやって来たこの地には、神の火が燃えさかっているのだ。そう、ここには神の火が燃えている。諸君らの確執や反目など、いかほどのものか！ ドイツ人もフランス人も、アイルランド人もイギリス人も、ユダヤ人もロシア人も、みな坩堝のなかに入るのだ！ 神がこのアメリカを創りたもうておられる。<sup>25</sup>

この戯曲で「坩堝」という表現が用いられるのは、上の文章が初出である。ここでアメリカは「神の坩堝」であり、「偉大なるメルティングポット」であると形容されているが、英語の原文では神の坩堝は“God’s Crucible”、偉大なるメルティングポットは“the great Melting-Pot”と坩堝に対応するそれぞれ異なる同意語が使われている。ザングウィル自身、この戯曲の題目を“crucible”と“melting-pot”のいずれにするか迷った末に、後者に決めたという。

第3幕の終わりで、このドラマの一つのクライマックスが出現する。それはヴェラの父親がボグロムの現場にいたばかりか、それを指揮していたことが判明するシーンである。このことを知ったデイヴィッドの心の中で強い心理的葛藤が生じ、ヴェラとの結婚について思い悩む。しかし、「アメリカ交響曲」の作曲にかける情熱と、アメリカは「神のメルティングポット」であるという信念の力によって、デイヴィッドはこの障害をも乗り越える。「アメリカ交響曲」はついに完成し、初演は大成功のうちに終わる。第4幕の終わり、まさに西の地平線に沈まんとする夕日をセツルメントハウスの屋上から眺め、2人がその美しさに感動する場面幕となる。はるか遠くには自由の女神像が夕陽に映えて黄金色に輝き、路上を見下ろすと、そこにはニューヨークの群衆が街路を行き交うのが見える。デイヴィッドは次のようにヴェラに熱く語りかける。ここでデイヴィッドは再びメルティングポットという言葉の口にする。

〈デイヴィッド〉

ここに偉大なるメルティングポットが横たわっている。聞いてごらん！ 君には、どよめき、ぶつぶつとたぎるメルティングポットの音が聞こえないのかい？（中略）ああ、何とかき混ぜり、沸き立っていることか。ケルト人もラテン系も、スラブ系もチュートン系も、ギリシヤ系もシリア系も——黒人も黄色人種も……。

〈ヴェラ〉

ユダヤ教徒もキリスト教徒も……。

〈デイヴィッド〉

そうだよ。東も西も、北も南も、椰子も松も、極地も赤道も、三日月〔イスラム教〕も十字星〔キリスト教〕も——かの偉大なる錬金術師たる創造主が、その清めの火でもって、なんと見事にそれらを溶かし、融合させたことだろう！ それらはここに連結し、人類の共和国であり、かつ神の王国たるものを築くのだ。ああ、いとしのヴェラよ、あらゆる民族と人種が、神を崇拜し過去を振り返るためにやってくるローマやエルサレムの栄光などはいかほどのものだろう。すべての人種と民族が、労働し未来を開くためにやって来るアメリカの栄光に比べれば。<sup>26</sup>

## 戯曲『メルティングポット』における隠喩の考察

上の文を読めば、ザングウィルが錬金術の隠喩 (metaphor) を盛んに用いていることが明らかであろう。デイヴィッドはこの戯曲のなかで、創造主たる神を錬金術師に喩え、神が「不純物を取り除く清めの火」(purging flame) によって、多様な人種・民族を溶かし、融合させたと述べている。さらにアメリカという神のメルティングポットを描写して「どよめき」(roaring)、「ぶつぶつとたぎり」(bubbling)、「かき混ぜり」(stirring)、「沸き立ち」(seething)、「溶かし」(melts)「融合させ」(fuses) と形容している。読者あるいは観客の視覚あるいは聴覚に訴えることによって、鮮明なイメージを喚起する描写になっている。

ところで、この戯曲のなかでは、移民たちは自ら進んでメルティングポットのなかで溶けて融合し、アメリカ社会に完全に同化することが暗黙の前提になっているように思われる。しかもこの同化のプロセスは錬金術師たる神の意志によることが明らかであり、そこには人間の意志が作用する余地は残されておらず、いわば同化は自動的に進むものとして描かれている。しかもこのプロセスはいまだ終わっておらず、依然として進行中なのである。そしてこの坩堝の中から将来「新しい人間」が現れることが期待されているのだ。

このように、ザングウィルのメルティングポットは、想像力をかきたて、精神を鼓舞することにおいて他に類のないイメージ喚起力を備えているといえる。このザングウィルの戯曲の公演後、シンボルとしてのメルティングポットが幅広い層の人びとに受け入れられ、広く行きわたった理由の一つはここにあったと思われる。もっとも、皮肉なことに、アメリカのユダヤ人の間ではこの戯曲の評判はあまり芳しいものではなかったようだ。それというのも、ザングウィルの戯曲『メルティングポット』は明らかに、ありとあらゆる人種・民族がアメリカという坩堝のなかで溶けて完全な形でアメリカ社会に同化することを説いているように見えたからである。ユダヤ人あるいはユダヤ教徒としての独自性やアイデンティティに固執する多くのユダヤ系アメリカ人にとっては、これは到底受け入れることのできない要求であったろう。<sup>27</sup>

## 結 論

最後に、メルティングポット論の問題点について言及しておこう。社会学的同化理論の1つのモデルとしてメルティングポット論を見ると、それが実はきわめて曖昧な概念であり、レトリックの域を抜け出しておらず、到底厳密な社会学的概念と呼べるようなものではないことに気がつく。ミルトン・ゴードンも指摘するように、「メルティングポット」の概念は曖昧なレトリックによる表現を唯一の拠り所としている。そしてそのレトリックたるや、その目指すところがいかに高邁であろうとも、社会組織や行動にまつわるさまざまな次元でこの用語の正確な意味を示す手がかりは、ほとんど示していないのである。<sup>28</sup>

メルティングポットが与えるイメージのうちの最も強いインパクトは「溶ける」という点にあるといえる。しかし、同じく溶けるといっても、その内容は具体的に何を意味するのか、必ずし

も明確ではない。すなわち、アメリカに移民として渡ってきた人種・民族集団が、相互に婚姻を繰り返す（すなわち交婚する）ことによって「生物学的に」溶け合う（すなわち混血する）のか、それとも多様な異なった文化が相互に融合することで「新しい文化」に変容するのか。<sup>29</sup> またすべての要素が対等に融合するのか、それとも主成分となるべきものがあるのか。後者の場合、主成分となるのがアングロ・サクソン系の文化であるとする、それ以外の文化は不純物としてメルティングポットから取り除かれるべきなのか。もしそうだとすると、それはアングロ・コンフォーミティ論と実態は変わらないことになってしまうのか。

このようなメルティングポット論の曖昧さのゆえに、メルティングポットが果たす機能に関しても多様な解釈を許してしまい、時には相反する解釈がなされるケースさえ見られた。たとえば、移民や同化に関してその人がどのような見解を抱いているかによって、メルティングポットの機能についての解釈は大きく異なったものになりうる。すなわち、自由な移民政策を唱え、アメリカには移民を同化させる力があると思っているリベラルな考えの持ち主たちは、移民を受け入れることで文化的多様性や活力が増すと考え、メルティングポットにそのような機能を期待するだろう。しかし、自由な移民政策に賛成できず、移民の同化に懸念を抱いている保守的な考えの人たちは、移民の持ち込む文化を不純物として取り除き、アングロ・サクソンのアメリカ文化に作り変える浄化作用をメルティングポットに期待するであろう。<sup>30</sup>

フィリップ・グリーンソンはシンボルとしてのメルティングポット論をめぐる論議の詳細な分析をした結果、これまでに多くの研究者によるさまざまな攻撃がメルティングポット論に対して仕掛けられてきたが、エスニック・グループ間の相互作用や移民の同化過程を表わすシンボルとして、これに取って代わるものは他に見当たらないとの結論に達している。確かにこれまでも多くの論者によってメルティングポットに代わる言葉が提示されてきている。それらの中からいくつか例を挙げると、「シチュー」「スープ」「サラダ」「サラダボウル」「ミキシング・ボウル」「モザイク」「万華鏡」「文化的虹」「オーケストラ」等々である。しかしこれらのどれをとっても、メルティングポットのもつイメージ喚起力に勝るものは見当たらないという。<sup>31</sup>

確かに社会学的同化理論として見るとメルティングポット論は極めて欠陥の多い理論モデルであり、その多義性のゆえにこれまで多くの誤解を招き、また多くの批判や攻撃にさらされてきた。しかしそのこととメルティングポットがシンボルとして人々に与えてきたインパクトの強さは別の問題である。カントーウィッツは歴史的に誤解されてきたメルティングポット論の見直しを提唱して、次のように述べている。「メルティングポットの観念は、近年極めて歪曲され誤解されてきているので、その主要な特徴を強調することは大切である。第1に、それは双方向のプロセスである。移民とアメリカ人の両者がメルティングポットの中に投げ込まれるのであり、両者がともに彼らの特徴の若干を放棄し、新しい特徴を獲得するのである。第2に、それは未来志向的なプロセスである。理想的なアメリカ人のタイプは未来に存在するのであり、誰もそれがどのようなものになるか正確にはわからない。最後に、それは希望に満ちた寛容なイデオロギーである。それは強制的でも抑圧的でもない。」<sup>32</sup>

- <sup>1</sup> 同化理論の研究で著名なアメリカの社会学者ミルトン・ゴードンは移民の同化を単一の過程ではなく、文化的同化 (cultural assimilation)、構造的同化 (structural assimilation)、婚約的同化 (marital assimilation) の3過程に区分したことで知られている。同化は婚約的同化、すなわち人々がエスニシティの違いを乗り越えて自由に婚姻するようになることにより完成するが、特に重要だったのは、彼が文化的同化と構造的同化を区別し、現代アメリカにおいて文化的同化はかなり進行しているが、構造的同化はまだそれほど進行していないとした点であった。文化的同化とは文化的変容であり、移民が自己の出身国の父祖伝来の文化を棄てて、ホスト社会の文化、すなわち言語、習慣、消費パターン、価値観、信条体系などを採用することである。現代アメリカ社会のヨーロッパ系移民の子孫のあいだではこれは既に一般的に起こっている。これに対して、構造的同化とは相互の交際における同化であり、学校や職場のみならず、自発的結社や社交においてもホスト社会の他の者たちと交じり合うことである。移民系の者たちは、職場や学校、居住地区においては非差別的につきあうが、教会や社交クラブ、親戚関係などの密接な人格的相互作用においてはまだエスニックの線に沿って行動している。ゴードンはその典型としてユダヤ系の場合を挙げている。野村達朗著「アメリカ移民史学の展開(1)——「新移民史学」以前のヨーロッパ系移民史研究——」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要)第16号、2001年9月、58-59頁。
- <sup>2</sup> ミルトン・ゴードンによれば、アメリカの歴史的経験を通じて、同化 (assimilation) の哲学は3つの主要な軸、すなわち「アングロ・コンフォーミティ」「メルティングポット」「文化的多元主義」を中心に展開してきている。「アングロ・コンフォーミティ」理論とは、アングロ・サクソン系コア集団の行動や価値観を好んで採用するために、移民は自身の父祖伝来の文化を完全に放棄することが必要だとする理論であり、「メルティングポット」の考えとは、アングロ・サクソン系の人々が他の移民集団と生物学的に合同し、それぞれの文化が溶け合って新しいアメリカ的な文化を形成するというものである。そして「文化的多元主義」とは、アメリカ市民として生活しアメリカ社会への政治的・経済的統合を図るという脈絡の範囲内で、後からやってきた移民集団のコミュニティ生活や文化がかなりの部分保持されることを仮定したものだ。これらのなかで「文化的多元主義」は比較的后発のものであり、もっぱら20世紀の経験や反省から生れたものである。19世紀アメリカを特徴づけているのは、非イギリス系住民をイギリス化するという「アングロ・コンフォーミティ論」か、さまざまなヨーロッパの遺産から新しいアメリカ的文化タイプを創出するという「メルティングポット論」かのいずれかを、あからさまに、もしくは暗黙のうちに実践しようとする姿勢だった。Milton M. Gordon, *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins*, Oxford University Press, 1964, pp. 85-86. (ミルトン・M・ゴードン著/倉田和四生・山本剛郎訳『アメリカンライフにおける同化理論の諸相——人種・宗教および出身国の役割——』晃洋書房、2000年、82頁。)
- <sup>3</sup> ミルトン・ゴードンによれば、アングロ・コンフォーミティ (Anglo conformity) という用語が最初に紹介されたのは、次の著書においてであった。Steward G. Cole and Mildred Wiese Cole, *Minorities and the American Promise*, Harper and Brothers, 1954, Chapter 6.
- <sup>4</sup> Stephen Steinberg, *The Ethnic Myth: Race, Ethnicity, and Class in America*, Beacon Press, 1981, p.73. この他にメルティングポットの復活について触れているものとしては次の文献がある。Rudolph J. Vecoli, "Return to the Melting Pot: Ethnicity in the United States in the Eighties," *Journal of American Ethnic History*, Fall 1985. Edward Kantowitz, "Ethnicity," *Encyclopedia of American Social History*, eds., Mary K. Cayton, Elliott J. Gorn, and Peter W. Williams, Vol. 1, 1993. Michael Barone, *The New Americans: How the Melting Pot Can Work Again*, Regnery Publishing, 2001. メルティングポット論の復活について言及している邦語論文としては次の文献を参照されたい。野村達朗著「アメリカにおける多文化主義とその限界」『アメリカ研究シリーズ』(立教大学アメリカ研究所) No. 19, 1997年3月。野村達朗著「アメリカ移民史学の展開(3)——統合をめぐる今日の論議——」『人間文化』(愛知学院大学人間文化研究所紀要)第17号、2002年9月。
- <sup>5</sup> James Hector St John de Crèvecoeur, *Letters from an American Farmer*, Oxford University Press, 1997. 初版は1782年。クレヴクール著/斎藤眞他編集、秋山健他訳『アメリカ農夫の手紙』研究社、1982年。

- <sup>6</sup> Crèvecoeur, *op. cit.*, pp.43-45. クレヴクール、前掲訳書、75-76頁。
- <sup>7</sup> Werner Sollors, *Beyond Ethnicity: Consent and Descent in American Culture*, Oxford University Press, 1986, pp.75-76. ワーナー・ソラーズはアメリカ文学を専攻するハーヴァード大学教授。筆者はメルティングポットを隠喩もしくはレトリックとして考察する際に、多くの示唆を本書から得ている。ソラーズはアメリカにおけるエスニシティは原初的な力とか古めかしい残存物としてよりも、過去の緊密なキンシップ集団に取って代わる現代的なものとして理解している。彼は本書のなかで「エスニシティは現代アメリカにおいて絶えることなく新たに発明され続けている」(p. 14) と述べ、「エスニシティの発明」(invention of ethnicity) という概念を提唱したのである。詳細については次の論文を参照されたい。Werner Sollors, “Introduction: The Invention of Ethnicity,” Werner Sollors, ed., *The Invention of Ethnicity*, Oxford University, 1989.
- <sup>8</sup> Russell Nye, *American Literary History: 1607-1830*, Knopf, 1970, p.157.
- <sup>9</sup> Gary Gerstle, “Liberty, Coercion, and the Making of Americans,” *The Journal of American History*, September 1997, p.525.
- <sup>10</sup> シカゴ学派の社会学者による移民のアメリカ社会への同化に関する研究については、次の文献を参照されたい。William I. Thomas and Florian Znaniecki, *The Polish Peasant in Europe and America*, 2 vols., Dover Publications, 1958. 初版は1918年から1920年にかけて5分冊の形で出版されている。Robert E. Park and Ernest W. Burgess, *Introduction to the Science of Sociology*, The University of Chicago Press, 1921. Robert E. Park, *Race and Culture*, The Free Press, 1950.
- <sup>11</sup> Gerstle, *op. cit.*, pp.529-530.
- <sup>12</sup> Steinberg, *op. cit.*, pp.46-51.
- <sup>13</sup> Arthur Mann, *The One and the Many: Reflections on the American Identity*, The University of Chicago Press, 1979, p.117. 本書第5章 (pp.97-124) のメルティングポットをめぐる議論は興味深い。
- <sup>14</sup> Frederick Jackson Turner, “The Significance of the Frontier in American History,” *The Frontier in American History*, Dover Publications, 1996. 初刊は1920年にニューヨークのHenry Holt and Co.から出版されている。ターナーの本論文は、1893年7月12日にシカゴで開催されたアメリカ歴史学会で読まれた。フロンティア理論の形成について詳しくは、渡邊眞治著『ターナーとフロンティア精神』御茶の水書房、1973年を参照されたい。
- <sup>15</sup> Turner, *op. cit.*, p.24.
- <sup>16</sup> *Ibid.*, p.190.
- <sup>17</sup> Arthur Mann, *op. cit.*, pp.119-120.
- <sup>18</sup> ターナーのフロンティア理論に対する賛否両論を集めた論文集としては、次の文献を参照のこと。George Rogers Taylor(ed.), *The Turner Thesis Concerning the Role of the Frontier in American History*, D. C. Heath and Co., 1949.
- <sup>19</sup> Gordon, *op. cit.*, p. 119. ゴードン、前掲訳書、114頁。
- <sup>20</sup> Edward N. Saveth, *American Historians and European Immigrants*, New York, 1948, p.122.
- <sup>21</sup> *Ibid.*, Chapter V, “Frontier and Urban Melting Pots.”
- <sup>22</sup> ボグロムとはロシア語で略奪や破壊を意味するが、特にユダヤ人に対する集団的な略奪、破壊、暴行、虐殺を意味する言葉である。1881年にロシア皇帝が暗殺されたが、皇帝暗殺はユダヤ人の仕業だという噂がひろがり、これを機にロシア各地にボグロムが波及することになった。その最高潮は20世紀初頭に来た。1903年、キシニョフに始まったボグロムは1906年まで荒れ狂い、1905年10月には101の都市で3000人の死者、1万人以上の負傷者が出た。このようにロシア・ユダヤ人の大量移住の原因として、ツァーリズムによる抑圧政策の強化とボグロムがあったことはまちがいない。野村達朗著『ユダヤ移民のニューヨーク——移民の生活と労働の世界』山川出版社、1995年、36-37頁、を参照。
- <sup>23</sup> Israel Zangwill, *The Melting-Pot: Drama in Four Acts*, Ayer Company Publishers (Reprint Edition), 1999. 初版は1909年にマクミラン社から出版されている。
- <sup>24</sup> Arthur Mann, *op. cit.*, p.100.
- <sup>25</sup> Zangwill, *op. cit.*, p.33.

<sup>26</sup> *Ibid.*, pp. 184-185.

<sup>27</sup> Philip Gleason, "The Melting Pot: Symbol of Fusion or Confusion?," *American Quarterly*, No.16, 1964, p.25. この論文でグリーソンは、シンボルとしてのメルティングポットについて詳細な検討を加えており、筆者は本稿執筆にあたり多くの示唆をグリーソン論文から得ていることを特記しておきたい。

<sup>28</sup> Gordon, *op. cit.*, p.124. ゴードン、前掲訳書、119頁。

<sup>29</sup> Gleason, *op. cit.*, p.35.

<sup>30</sup> *Ibid.*, p. 36.

<sup>31</sup> *Ibid.*, pp. 32-34.

<sup>32</sup> Edward Kantowicz, "Ethnicity," Mary K. Cayton, Elliott J. Gorn, and Peter W. Williams, eds., *Encyclopedia of American Social History*, Vol. 1, Charles Scribner's Sons, 1993, p.459.